

次に開発されていったのは、丘陵周辺の低地に立地する集落と、丘陵内でも、辺地である。こうした大規模な開発は主に鎌倉時代に行われた。

このようにして、平安時代末には現在ある集落の $\frac{2}{3}$ が成立し、中世末までには、残りの集落も成立していたことが判明し、本地域の集落が、いかに長い歴史を持つものかがわかった。そして、本地域では常に、拡大、発展の作用が、丘陵周辺から内部に及ぶというパターンが繰り返されていることもわかった。これは、先に述べた丘陵周辺と内部の、自然条件の差に基づくものだと考えられる。

長岡市の商業

金 容 子

研究範囲に決めた新潟県長岡市の地域的特色として、県中部の中心都市で商工業が盛んな都市である、交通上の要衝地である、百貨店・喫茶店が都市規模の割には多数立地している都市である、などを挙げることができる。これらの特色は商業を長岡市の代表的産業たらしめる要因であり、そこで本論文では、これらの特色と商業発展との相関関係を明らかにし、長岡市の商業の地域性を考察することを研究目的とする。商業は卸売業、小売業に大きく分けられるが、卸売業については主にその発展過程、商圈について、小売業については長岡市を代表する中心商店街の構造と顧客圏について考察することにした。

本論文の枠組は 四章に分け、第一章では自然条件、人文条件両面より地域を概観し、第二章では産業の発展過程として、工業の発展過程、それに伴う農業の衰退、商業の発展過程について資料、文献などにより調査した結果を述べた。第三章では中心商店街の商店街力の圧倒的な強さを明らかにし、中心商店街の構造と魅力、市内地区、周辺市町村別に顧客圏について考察し、最後に、長岡ニュータウンの建設に伴い変貌しつつある長岡市の将来像と要約を述べまとめとした。

研究の結果、長岡市は古来より信濃川と深い関係を持つ河川交通上の要衝地であって、この地の利を生かして周辺地域に商圈を拡大して行った繊維品類を代表業種とする卸問屋町であった。そして信越本線、上越線の開通により陸上交通上の要衝地に移り、卸問屋はさらに商圈を広げ飛躍発展した。現在の卸売業は主として狭い範囲の後背地を販売圏としているが、県外では仕入先、販売先ともに関東地域が主で、長岡市は関東経済圏に含まれている。従って長岡市の今日の商業の発展は、交通の発展とともに歩んで来た卸売業を布石にしてもたらされた。小売業については、長岡市の小売業の1店当りの年間販売額は、県庁所在都市で年間販売額県内一位である新潟市よりも大きい。そして小売業を営む店舗の組織体である市内商店街の中でも中心商店街に対する消費者の買物支持率が非常に高く中心商店街力が圧倒的に強い。従って長岡市の小売業の販売力の強さは中心商店街力に大きく依存していると考えられる。この中心商店街力の強さは、交通至便な所に立地している、百貨店をはじめとする大規模店や喫茶店、その他種々な魅力ある商店が多いなどに基づいている。さらに商店街は市民と流入者に商品を供給することを業務とするので、市内地区、周辺市町村別に中心商店街の顧客圏を最寄・買回品支持人口率、時間距離、通勤・通学依存率を指標として調べた結果、市内各地区や近距

離周辺町村居住の消費者の強い支持によって中心商店街は成り立っている。統計上の商圈はさらに広範囲に渡り、新潟市と県中部以北の地域をほぼ二分して商圈に含み入れている。

現在、長岡市は中心商店街が独占的商業核を構成して他の商店街との商店街力格差が大きい。そこで今後の関越、北陸高速自動車道、上越新幹線の高速度交通体系の整備を契機に、今までの線の商店街を面的、空間的方向に再開発する、長岡ニュータウン建設の構想が着々と実行に移されている。完成後は人口25～30万人に達する予定であり、日本海地域における魅力ある地方中核都市の一つに発展することが期待されている。

大川市の家具製造業に関する地理学的考察

古賀 秀美

筑後川河口に位置する大川市はわが国有数の家具産地である。論文では、存立基盤を中心に大川の家具製造業の動向と実態を明らかにすることを目的とした。

まず、序論でわが国の家具製造業について概説した。第一章で地域の概観を行なった。第二章で大川の家具製造業の概観を行なった。そして、第三章で存立基盤としての原材料・技術・労働力・輸送・市場を明らかにした。第四章では、問題点と今後の展望を考察した。

卒論要旨は次のとおりである。

大川は伝統的家具産地である。近年の発展は著しく、多種多様の家具を産する全国一の家具産地となっている。零細企業の集団地であるが、徐々に企業規模拡大がなされ、又、流通の近代化も進められている。

原材料である木材は昭和20年代前半まで筑後川上流の日田から筏流して運搬され利用された。筏流し中止を契機にわが国家具製造業界の原材料変革に応じてゆき、現在、完全に外材依存となり、合板も利用される。大川には、家具製造業関連産業としての製材業・合板加工業・原材料販売業が発達しているため原材料が効率よく供給される。

木船製造技術を根底にしたのが大川の伝統的手工業の技術であった。それは決して優秀な技術ではなく、昭和30年代以降の機械化とともに自然消滅した。現在機械生産がなされ、その結果大量生産・品質向上に成功した。

大川市一帯は農村地帯で、農村の安価な余剰労働力利用を家具製造業の立地要因のひとつとしていた。現在、以前と同様労働力は川とその近隣市町村から供給されているが、高度成長期以降労働力不足の傾向が現われている。しかし、大都市産地と比べれば労働力の確保は容易であろう。又、石油ショック以降労働力不足は緩和されている。

大消費地が隣接せず原木の産地でもない大川にとって、製品移出、木材移入に輸送は不可欠のものである。昔は筑後川・若津港を利用した水運に頼っていたが、鉄道・トラック輸送へと移行してゆき、現在、全国津々浦々、戸口から戸口への輸送が可能なトラック輸送主流である。近年の道路網の拡充・トラック輸送の発達市場拡大を促がし大川を発展へ導いた。